

先だって、以前1年半ほど通い、その後、殆ど飲み会だけに同席させていただいているシャンソン・フランセーズの教室に顔を出し、ジャック・ブレルの「アムステルダム」の原語歌詞のプリントをいただいた。当然、講座終了後に飲みに行ったので、そのプリントは机の上に放り出したままである。しかしそれから一週間後、「ああ、そういえば、この歌は訳したことがなかったっけ」と気づき、訳してみた。内容の重さに対する軽快な言葉のリズム。現在形羅列の踏韻が心地よい。しかし、辞書にはあるがいくつかの意味のどれを選択するべきかと、辞書には載っていない言葉の訳、言葉に内包されている意味を日本語でどう表現するかで悩んだ部分がある。

まず辞書には載っているが、いくつかの意味から選択しなければならない場合。ほぼ絶対的メインの意味を選択すると、どうも内容的に少しずれが生じる。そのとき、私はそのフランス語に当たる英語を探して、自分の頭の中にある訳と一致させる。

次に辞書にはない言葉の訳であるが、これもほぼ英語変換の中で、語源から見つけることが多いが、時にはラテン語の辞書も引く。かなり古い歌の場合は逆で、ラテン語とイタリア語が助けになった。結局どれもラテン語（あるいはギリシャ語）から派生したものであるから、どれかを調べれば、完璧とはいかないまでも、納得するところへ何とか辿りつくことができる。

そして言葉に内包されている意味であるが、これはヨーロッパの歴史、特に戦争によって統治が変わったということが重要になる。それと宗教も欠かせない。従って政治と宗教から見た統治と市民生活の状況という歴史的背景を調べることになる。その時代に生きた人々が社会へ何を訴えているか、それを視覚的に表したのが絵画であり、心情的に表したのが歌であると思う。その背景を抽出することが必要だ。

以前、ある学者が、ある小説を「通訳的訳」と評したのを聞いたことがあるが、今回の「アムステルダム」において、私はその意味を把握した。「詩」という文学の範疇に入る表現は、言語が訳せるだけでは不足なのだということ。それは以前から感じていたことであるが、今回強い現実となった。そして以前CDの対訳で見た訳者による単語訳と熟語訳の違いを思い出し、通訳と翻訳の違いがよくわかった。

そして思う。「訳」もその業界の中で歴史を持つ。私はある翻訳本の後記で、先達への感謝の言葉を見たことがある。その時は何気なく読み過ぎしたが、今はそれがわかる気がする。シャンソン・フランセーズが日本で殆ど知られていなかった時代、当然詳細な辞書も普及していなかった時代、雑音入りのテープから歌詞を聴き取り、短時間で翻訳する一発勝負。その先達の業績はひとつの歴史である。いろいろな資料が普及した今となつては時に誤訳も見つかるが、その方たちの文化的視点は、むしろ今よりも深い。例えて言うなら、水道が当たり前の時代に井戸が想像できないようなところに、感覚的補佐を与えてくれる。その補佐があるのが翻訳で、ないのが通訳だ。

そして「伝える」ことについて。先の教室で偶然、ライター(Writer)を職業とする方にお目にかかった。教室が終わってから、ちょっとしたメールの遣り取りがあったのだが、その“手紙”における「目の前で話しているかのような感情のこもった無駄のない洗練された言葉遣い」はさすがである。新聞や雑誌を無意識に読んでいた時には気付かないものを発見した。言葉は中身が詰まってこそ伝達の道具である。(2014.7.20)